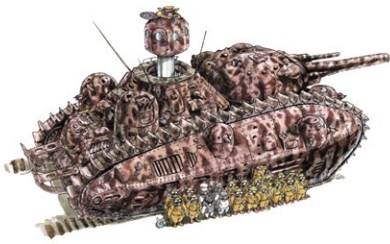
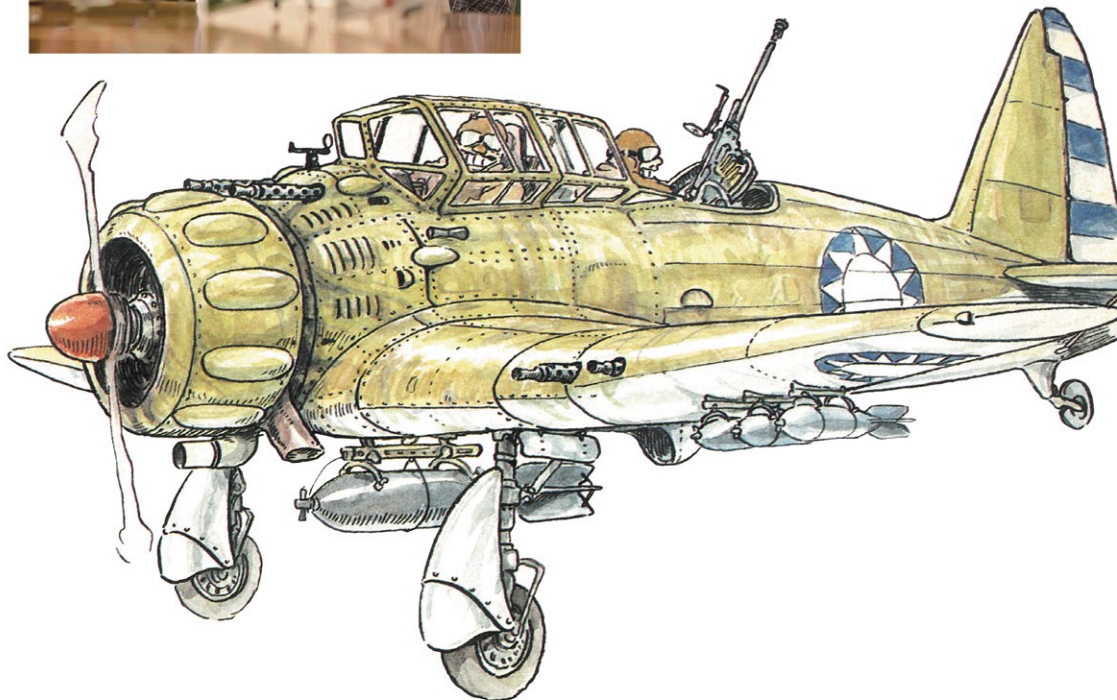




模型雑誌の中の 宮崎駿



大日本絵画
DAINIPPON KAIGA



模型雑誌の中の宮崎駿

大日本絵画

DAINIPPON KAIGA

模型主雑誌と宮崎 駿監督、

その経緯と裏側

スタジオジブリの宮崎 駿監督にプラモデル作りの趣味はない。それなのに、その顔写真や記事をプラモデルの専門雑誌の中で度々見かけてきたのはどうしてなんだろうか。

例えば『月刊モデルグラフィックス』（以下MG）誌では断続的ながら、長い長い間、絵物語や漫画の連載をしてくれている。ジブリ映画『紅の豚』や『風立ちぬ』は、その連載記事を原作としている。

そればかりじゃなくて、戦車模型の専門誌（そんな珍なる雑誌があるんですよ）、『月刊アーモアモデリング』誌や、飛行機模型の専門誌（こんなのもあるのよ）、『隔月刊スケールアヴィエーション』誌では、マニアックな模型の製作記事にまでコメントをくれたりしている。

自分で模型を作る趣味はなくても監督が意外と模型雑誌に興味を持ってくれている『宮崎 駿の雑想ノート』で描かれている「狂気の情熱に彩られた」珍無類な兵器類を、模型という立体で見ると、平面の絵や写真ではわからなかった思わぬ発見があったり、模型を徹底的に本物そっくり、限界まで精密に作り込もうとしているスケールモデラーの「狂気の情熱」を面白がっていたのか……、どちらか、あるいはその両方からだった気がする。

MG誌の創刊は1984年の大昔だ。当時、国内にはすでに月刊モデルアート誌、月刊ホビージャパン誌などのプラモデル専門の月刊誌があった。筆者は先行の老舗二誌に加え第三の総合模型雑誌（MG誌）を作ろうと目論んでいた。そして創刊号に載せる、読者をびっくりさせるような記事を求め、右往左往していたその折も折も……。

「模型雑誌にびっぴりの原稿を描ける人がいてねえ」

日本のアニメーションの草分け、同時に軍用車両研究の大先達、そしてモデルでもあった大塚康生さんが、こんな電話をかけてきた。

「それがねえ、すぐ面白んだよ。一度、話を聞いてみると……」

電話線を伝って、目を糸のように細くしたいつもの笑顔が見えるようだった。その声は、今でも耳の底に残っている。

大塚さんが絶賛する面白い記事を描いてくれる人。それは当時、阿佐ヶ谷の個人事務所、映画『風の谷のナウシカ』に続く劇場用映画の構想を練っていた宮崎 駿監督であった。

大塚さんは、筆者のかつての職場、代々木の模型雑誌社によく原稿を届けに来てくれていた顔見知りだった。当時はテレビアニメ『ルパン三世』の作画監督にして、軍用車両のオーソリティーと言う認識だった。

大塚さんは後輩の宮崎さんがアニメーションの仕事の合間に描いては捨てていた落書きをゴミ箱から拾い出して保存したり、その頃、宮崎さんが東京ムービーの広報誌（ム）に時々描いていた1ページの絵物語にも注目していた。宮崎さんがそんな類の話をもっと描きたくて発表の場を探していることを知っていたのである。

当時25歳の筆者は視野の狭いミリタリーと模型のマニアで、アニメーションのことは何も知らず、阿佐ヶ谷に向かう中央線の電車の中で、同行していた創刊メンバーの編集者M君に「宮崎さんってどんな人？」と聞いていたような有様だった。

仕事場で対面した宮崎さんは挨拶もそこそこに「飛行機は詳しいですか？」と尋ね、間髪を入れず「いやア、アルカシエールがねと、見たことも聞いたこともない飛行機の話が始まり面食らった。

「クージネ70アルカシエール（虹）号は大西洋横断の郵便飛行のため1930年代にフランスでたった1機だけ作られた珍しい飛行機だ。

目を白黒させているうちに、創刊を間近に控えていたMG誌に『宮崎 駿の雑想ノート』と言うカラーの絵物語を連載してくれると言ったことになった。

連載の第一話は「ポストニア王国」が輸入したユンカースG・38、同様に輸入

した日本陸軍では九二式重爆と呼ばれていた巨大な重爆撃機（この飛行機もその日まで知らなかった）の話「知られざる巨人の末弟」だった。

ポストニアと言うのは、実在するポストニアとエストニアを合成して作った架空の国名だった。

後年、宮崎監督たちと共に、バルト三国のひとつ、フィンランド湾に臨むエストニアまで、ドイツのティーガー重戦車がソ連軍と戦った戦跡の現地取材に出かけることになるのだが、その時は「エストニア？」そんな国は存在も知らなかった。

ホントに何もかも、編集者にとっても読者にとっても「知られざる」だった。

さて話はまた1984年。当時、宮崎 駿監督は徳間書店の月刊『アニメーション』に漫画『風の谷のナウシカ』を二年以上連載していて、それが少し息苦しくなってきたのか、息抜きに『雑想ノート』のように趣味一色で短くて気楽な話を描きたいと思っていたようだった。だからこそMG誌での連載はその場で簡単に決まってしまったのである。

MG誌の『雑想ノート』の連載は、とりあえず『天空の城ラピュタ』の制作開始まで続き、その後、映画の完成まで一年半ほどはお休みとなった。

その後もそのパターンは繰り返され、

宮崎監督が新作の制作にかかると雑想ノートの連載は二年ほど休載になり、映画が公開されると復活。次の新作まで半年ほど続いた。『雑想ノート』終了後は、新連載『宮崎駿の妄想ノート』が始まった。

一連の連載記事は大塚さんが「すぐく面白いんだよ」とおっしゃった通り、聞いたこともないような戦争と兵器の珍談奇談が目白押しで、「宮崎さん、どうしてこんなこと知ってるんですか？」と聞くと、「小学生の頃、古本屋で立ち読みした本で見てね」なんてネタもあり、その記憶力にもびっくりした。

とはいえ絵を描けるほど詳しいことまでは覚えていないので、監督の代理として、筆者が神田神保町の古書店街や洋書屋を回ったり、模型や兵器、軍事の研究をしている人たちに助けを求めたり、八方手を尽くして資料を探した。

存在を知る人も稀な珍しい兵器や戦いの資料である。なかなか見つからなかったけど、探すこと自体が宝探しのようで、とても面白かった。で、意外にも見つかることが多かったけど、資料を携えて急行すると、監督が待ちきれず、わからないところは想像で、もう絵を描いてしまった後だったり。「ああ、遅かりし由良助ですね」と言われたことも一度ではなかった。

今は相当マイナーなネタでもネット検索すれば、簡単に詳しい資料が見つかってしまうから、あの頃のような楽しみはもう味わえないね。

都内をウロウロするだけでなく、筆者はイタリア、ローマ郊外の航空博物館まで取材に行ったこともある。監督が『紅の豚』の続編としてボルコがサボイア・マルケッティSM79に乗ってドイツのポケット戦艦を雷撃する話『ボルコ・ロッソ最後の出撃』を描きたいけど、

SM79の内部がわからないと言ったからだ。筆者はイタリア語なんて、ボンジョルノとグラツチエ」しか知らないのに、見ず知らずのイタリアの皆さんの親切にも助けられ、粒々辛苦、たくさん写真を撮ってきたが『ボルコ・ロッソ最後の出撃』は実現しなかった。

筆者は原稿を受け取りに行くたびに宮崎監督の仕事場で兵器やら戦争の話で長居をしていた。そんな雑談の中から、監督に審査員をお願いする一風変わった模型の誌上コンテストがあれこれ何度も誕生した。MG誌の読者がどう思ってたかはわからないけど、二人で地味に面白がっていた。

また一時、監督が傾倒していた児童文学『フラッカムの爆撃機』に登場する英空軍の爆撃機ウェリントンモデルを再現したこともあった。

当時、大日本絵画から発売されていたドイツ軍の対戦車訓練用VHSビデオ『対戦車戦』も、暇さえあれば繰り返し見てくれていて「また見てる」と、奥さんに笑われたそう。

ここに出てくるドイツ軍の機関銃MG42の映像は、ジブリで作った短編アニメ『On Your Mark』の中の機銃射撃描写に生かされている。

月一度の原稿受け取りの際の雑談の主要テーマは時々変わった。よく覚えているのは大日本絵画の書籍『ティガー 無敵戦車の伝説』から始まった重戦車「ティーガー」の時代、ドイツの対空戦車「クレーブリッツ」の時代、「硫黄島防衛計画」の時代、「零戦」の時代等々。

拙著『ビルマ航空戦、上・下』に描かれた日本陸軍の戦闘機、一式戦の活躍に感化されたのか「日本軍最強の戦闘機

は一式戦三型じゃないかって気がしてきましたね」とおっしゃる「一式戦、隼」のミニブームもあった。

中でも書籍『ティガー戦車隊』の著者ドイツ軍の年若い戦車長オットー・カリウスの「泥まみれの虎」ブームは、病膏肓に入るレベルで、とうとうカリウス少尉が第二次大戦中にティガーで戦った戦場エピソードと、当時まだドイツで健在だったカリウス氏本人を訪ねる取材旅行にまで発展。その成果を得て、『宮崎駿の妄想ノート 泥まみれの虎』が出版されるに至ったのである。あの取材も面白かった。

本書の主人公はブタの姿で描かれているが、ドイツ軍(本物)が戦車戦闘教育の副読本に使いたいと打診して来たほど内容はシリアスだった。ただしカリウス氏本人に「なんで俺はブタなんだ？」と聞かれた時は、まことに困ったそう。

ブタといえば『紅の豚』のボルコも「なんでブタなのか？」と映画のインタビュアーのたびに、様々な媒体の記者に繰り返し尋ねられ、心底うんざりした監督は「ブタが好きだから」の一言で全て撃退していたとのことでした。

MG誌での宮崎漫画の最新作は戦国時代、北条氏の騎馬鉄砲隊を描く『鉄砲侍』の予定だった。

2013年、映画『風立ちぬ』完成後、映画監督引退を宣言。アトリエで過ごしながら、机に向かって日々『鉄砲侍』を描いているその姿はNHKの番組でも放映された。

しかし、その後12ページ半ほど描いたところで中断。20ページまで描けたらMG誌に連載第一回が掲載されるはずだったのだが、原稿は今も宮崎監督のアトリエのどこかで眠っている。

筆者はこの鉄砲侍でも資料探しに奔走。物語の舞台となる予定だった埼玉県「滝の城」城址を見に行ったり、火縄銃を200挺持っていると言うコレクターを訪ね、武士の馬や馬術を体験するため牧場にも行った(で、自分自身が騎乗で鉄砲ならぬ、弓を引く「スポーツ流騎馬」を始めることになってしまった)。

そして2023年、宮崎監督の最新映画『君たちはどう生きるか』のパンフレットに、次回作の案の一つとして「黄海海戦をテーマにした作品」への言及があるのを発見。

早速、台湾で出版されていた黄海海戦参加艦艇を全部CGで再現した図集を持ってジブリに赴き、その本を監督に手渡しして来た。もしかしたら『雑想ノート』にあった「竜の甲鉄」の拡大完全版が映画化されるのではと胸中期待して待っているが、その後、随分経つが新作映画はもとより『雑想ノート』連載再開の音沙汰もない。

宮崎監督の脳内では『黄海海戦』に続く、また別のブームが始まっているのかもしれない。

市村 弘

Hiroshi Ichimura

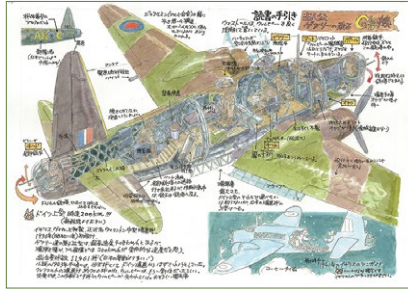
いちむら ひろし 1958年、茨城県生まれ。株式会社アートボックス代表取締役社長であり、編集者・作家・モデラーとしても活動。別名は梅本 弘、ローガン梅本。武蔵野美術大学を卒業後、株式会社ホビージャパンに入社し、横山 宏や松本州平など多くの著名モデラーを世に送り出す。1984年に『月刊モデルグラフィックス』を創刊し、後に『月刊アーマーモデリング』『隔月刊スケールアヴィエーション』を刊行。著書に『流血の夏』『ビルマ航空戦』(大日本絵画)などがある

年表



- 1984
 - ・映画『風の谷のナウシカ』公開(1984年3月)
 - ・『風の谷のナウシカ』連載 第17回〜第22回(『アニメジュー』1984年8月号〜1985年1月号)
 - ・雑誌ノット第1話 知られざる巨人の末裔(『月刊モデルグラフィックス』1984年11月号)
 - ・雑誌ノット第2話 甲鉄の意気地(『月刊モデルグラフィックス』1984年12月号)
 - ・雑誌ノット第3話 多砲塔の出番(『月刊モデルグラフィックス』1985年1月号)
- 1985
 - ・『風の谷のナウシカ』連載 第23回(『アニメジュー』1985年2月号)
 - ・雑誌ノット第4話 農夫の眼(『月刊モデルグラフィックス』1985年2月号)
 - ・雑誌ノット第5話 童の甲鉄(『月刊モデルグラフィックス』1985年3月号)
- 1985年5月号
 - ・『風の谷のナウシカ』連載 第24回(『アニメジュー』1985年4月号)〜第25回(『アニメジュー』1985年5月号)
 - ・『ストロエン2CV』は30年代フランス機の末裔なのである!!(『月刊モデルグラフィックス』1985年6月号)
- 1986
 - ・映画『天空の城ラピュタ』公開(1986年8月)
 - ・雑誌ノット第6話 九州上空の重轟炸機(『月刊モデルグラフィックス』1986年11月号)
 - ・雑誌ノット第7話 高射砲塔(『月刊モデルグラフィックス』1986年12月号)
 - ・雑誌ノット第8話 O'ship(『月刊モデルグラフィックス』1987年1月号)
- 1987
 - ・『風の谷のナウシカ』連載 第26回〜第27回(『アニメジュー』1986年12月号)〜1987年1月号)
 - ・『風の谷のナウシカ』連載 第28回〜第32回(『アニメジュー』1987年2月号)〜1987年6月号)
 - ・雑誌ノット第9話 特設空母安松丸物語(『月刊モデルグラフィックス』1987年2月号)〜3月号)
- 1988
 - ・映画『となりのトトロ』公開(1988年4月)
- 1989
 - ・映画『魔女の宅急便』公開(1989年7月)
 - ・雑誌ノット第10話 ロンドン上空1918年(『月刊モデルグラフィックス』1989年12月号)〜1990年1月号)
- 1990
 - ・雑誌ノット第11話 最貧前線(『月刊モデルグラフィックス』1990年2月号)
 - ・雑誌ノット第12話 飛行艇時代(『月刊モデルグラフィックス』1990年3月号)〜5月号)
- 1991
 - ・『風の谷のナウシカ』連載 第33回〜第42回(『アニメジュー』1990年4月号)〜1991年1月号)
 - ・『風の谷のナウシカ』連載 第43回〜第46回(『アニメジュー』1991年2月号)〜1991年5月号)
- 1992
 - ・映画『紅の豚』公開(1992年7月)
- 1993
 - ・雑誌ノット第13話 豚の虎(単行本用描き下ろし)『月刊モデルグラフィックス』1993年2月号)
- 1994
 - ・『風の谷のナウシカ』連載 第47回〜第57回(『アニメジュー』1993年3月号)〜1994年1月号)
 - ・『風の谷のナウシカ』連載 第58回〜第59回(『アニメジュー』1994年2月号)〜1994年3月号)
 - ・雑誌ノット第14話 ハンスの帰還 第1回(『月刊モデルグラフィックス』1994年3月号)
 - ・雑誌ノット第14話 ハンスの帰還 第2回(『月刊モデルグラフィックス』1994年4月号)
 - ・どうなる4号改造コンテスト(『月刊モデルグラフィックス』1994年5月号)
 - ・雑誌ノット第14話 ハンスの帰還 第3回(『月刊モデルグラフィックス』1994年10月号)
 - ・4号装甲強化案(『月刊モデルグラフィックス』1994年11月号)
 - ・4号戦車救済コンテスト 審査(『月刊モデルグラフィックス』1994年11月号)
- 1995
 - ・『テイガー』コンテスト 審査(『月刊モデルグラフィックス』1996年1月号)
- 1996
 - ・『映画』ものけ姫公開(1997年7月)





- 1998 妄想ノートNo.1 泥まみれの虎 (月刊モデルグラフィックス) 1998年12月号
- 1999 妄想ノートNo.2 泥まみれの虎 (月刊モデルグラフィックス) 1999年1月号
- 1999 妄想ノートNo.3 泥まみれの虎 (月刊モデルグラフィックス) 1999年2月号
- 2000 妄想ノートNo.4 泥まみれの虎 (月刊モデルグラフィックス) 1999年3月号
- 2000 妄想ノートNo.5 泥まみれの虎 (月刊モデルグラフィックス) 1999年4月号
- 2000 妄想ノートNo.6 泥まみれの虎 (月刊モデルグラフィックス) 1999年5月号
- 2001 映画『千と千尋の神隠し』公開(2001年7月)
- 2002
- 2003
- 2004 映画『ハウルの動く城』公開(2004年11月)
- 2005
- 2006 『プラカムの爆撃機』(岩波書店)刊行
- 2007
- 2008 映画『崖の上のポニョ』公開(2008年7月)
- 2009 妄想カムバック第1話風立ちぬ (月刊モデルグラフィックス) 2009年4月号
- 2009 妄想カムバック第2話風立ちぬ (月刊モデルグラフィックス) 2009年5月号
- 2009 妄想カムバック第3話風立ちぬ (月刊モデルグラフィックス) 2009年6月号
- 2009 妄想カムバック第4話風立ちぬ (月刊モデルグラフィックス) 2009年7月号
- 2009 妄想カムバック第5話風立ちぬ (月刊モデルグラフィックス) 2009年8月号
- 2009 妄想カムバック第6話風立ちぬ (月刊モデルグラフィックス) 2009年9月号
- 2009 妄想カムバック第7話風立ちぬ (月刊モデルグラフィックス) 2009年11月号
- 2009 妄想カムバック第8話風立ちぬ (月刊モデルグラフィックス) 2009年12月号
- 2010 妄想カムバック第9話風立ちぬ (月刊モデルグラフィックス) 2010年1月号
- 2011
- 2012
- 2013 映画『風立ちぬ』公開(2013年7月)
- 2014 『鉄砲侍』(描き下ろし)未掲載
- 2015
- 2016
- 2017
- 2018
- 2019
- 2020
- 2021
- 2022
- 2023 映画『君たちはどう生きるか』公開(2023年7月)
- 2024
- 2025



目次

2	模型誌と宮崎駿監督、その経緯と裏側
4	年表
7	1971～1981
8	宮崎さんの模型雑誌デビューは1971年の月刊ホビージャパン
9	extra episode:1
10	1981年、雑想ノートの萌芽『ぼくのスクラップ』
13	1984～1989
14	華麗なる仏軍用機に就いてのお話
16	悪役1号
18	オリジナル多砲塔戦車コンテスト発表記念
21	大塚康生・宮崎駿大戦車対談！
21	悪役発売中！
23	世界初の「忙しい」戦略爆撃機
25	1990～1999 Vol.1
26	蛇の目倶楽部
28	世にも珍奇なる仏軍機に就いてのお話
30	流麗なる伊軍戦闘艇に就いてのお話
31	流麗なる伊軍戦闘艇に就いてのお話(その2)
32	魅力的な魔物
33	敗北に言訳は不要だ
35	飛行艇タボハゼ
37	フォークト博士の顎 カーチス完成までの長い道程
39	米大統領候補ドナルド・カーチスの高速水戦
40	ボルコ・ロツン最後の出撃！
42	1/48サボイアS・21
43	extra episode:2
44	雑想大砲談 雑学と妄想の無限軌道
50	MG100号オメデトー！
52	(P)虎戦車の雑学と妄想
57	1990～1999 Vol.11
58	MFモデリング座談会
60	宮崎駿のオーディオ・クアトロのパンターの進化論
62	宮崎駿、土居雅博、IV号戦車とドイツ軍の色々を探る
63	スリムな追跡者SU-76
66	extra episode:3
68	今世紀最大の悲劇
69	僕は戦争マニアなんです。
70	IV号戦車救済コンテスト協賛特別座談会
72	IV号戦車を如何にすべきや
73	MG10周年記念IV号戦車救済コンテスト
80	ティーガーコンテスト主要審査員座談会
82	模型は実際に見てみたいとわからんでしょ
84	extra episode:4
85	extra episode:5
86	宮崎駿の雑想ノート妄想から現実へ……
88	AM創刊特別インタビュー 宮崎駿氏が語る
90	日本人は線、欧米人は光線 形の正確さと状態のリアリティ
92	『泥まみれの虎』単行本化計画が泥沼化 その真相を宮崎駿さんに聞く
94	サボイアS・21戦闘飛行艇復元計画
97	サボイアS・21を作ったおすコンテスト1999
102	宮崎映画の主役になり損ねた水爆
103	extra episode:6
105	2000～2024
106	宮崎駿監督とウィンピーと
108	責任者出てこい！ ってくらい乱暴な飛行機だね。
109	extra episode:7
110	鳥の隊長さんはどこに行ったのだろう
111	宮崎駿MG新連載『風立ちぬ』とは
112	いちばん美しいものがいちばん性能がいい
113	『飛行機』堀越二郎「この愛すべき存在を語り合おう
120	美人作りたい放題
121	金さんが行く第3回 映画監督 宮崎駿
122	宮崎駿新作漫画になるかも知れない『鉄炮侍』
123	騎馬鉄炮武者 蛭子八郎太、登場
125	宮崎駿が模型越しに追懐する『雑想ノート』
126	extra episode:8
127	宮崎駿が見た『泥まみれの虎』
	四十年分の編集後記

1970~1981

『モデルグラフィックス』創刊前夜、模型雑誌デビュー秘話と『雑想ノート』の原型ともなった『ぼくのスクラップ』

『雑想ノート』は1984年から『月刊モデルグラフィックス』（以下MG）で連載がはじまるが、じつは宮崎駿監督はそれ以前に模型雑誌『月刊ホビージャパン』（以下HJ）でデビューを果たしていた。本書2頁の[まえがき]にもあるように、MG創刊時に多大な援助をいただいた大塚康生氏が、HJ創刊からのメインライターだったことから、同じアニメ会社の後輩で趣味嗜好が共通する宮崎監督をカット描きに誘ったのである。

宮崎監督は1963年、東映動画に入社。大塚氏より十歳下であるが、労働組合活動や自動車趣味、歴史や軍事雑学などを通じ親交を深めていった。そのなかで宮崎監督の極めて高い作画能力と観察眼などを見抜き、その才能をだれよりも理解していたのが大塚氏だったといえる。

宮崎監督がHJにカットを寄せた1971年夏は大塚・宮崎両氏とも東映動画を退社しAプロダクションへ移籍した時期で、『ルパン三世』の最初のテレビシリーズ制作の只中であった。同作の作画監督の大塚氏は相当な激務だったと思われるが「趣味は別腹」という意識なのかHJでの執筆は継続中で、『長くつ下のピッピ』の企画が頓挫、ルパンの演出に参加前だった宮崎監督は大塚氏の誘いにひょいと乗った感がある。当時、大塚氏40歳、宮崎監督30歳……『ルパン三世』に流れる「大人のムード」とマニアクさは、そんな二人の軽妙な間柄が反映されているかのようだ。

模型雑誌の中の宮崎 駿

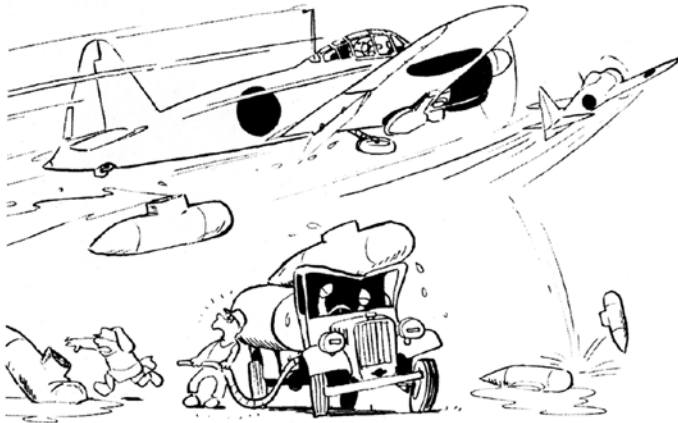
宮崎さんの 模型雑誌デビューは 1971年の 月刊ホビージャパン

文／吉祥寺怪人

宮崎監督がイラストを描いた『月刊ホビージャパン』1971年7～10月号では、大塚さんが「大塚やすお」名義で戦車やジープのイラストを描いている。当時、この豪華さに気づいている人はほぼいなかったらう



「月刊ホビージャパン」
1971年7月号



プラモなら、とけちゃうほどの暑さデース。

▲1971年7月号掲載の零戦。模型誌デビュー1作目が零戦というのが運命的である



「1機おとしたぞー」大塚初期、F4Fはよくがんばった。



「どうもスタイルが…」「へへ、テキサスの山ネコ共には十分でさ」

▲1971年10月号掲載のF4Fワイルドキャット。デフォルメとドラマが見事に調和している



「送ってこいっ」
P-38はまずイギリスに買手されたが、ひどい悪評。こんなもんでメッサーに勝てるかと、断わられてしまった。

▶1971年8月号掲載のP-38ライトニング。「星の王子さま」への憧憬がすでに表出しているのに注目。この回より「マンガ：宮崎はやお」とクレジットされた



「星の王子さま」の作者、サン・テグジュペリはライトニング偵察機で、北アフリカを出張、地中海上で、消息をたった。1944年7月のことである。



「これで、ゼロに勝てたと」おれの息子には絶対P-40のプラモはつくらせぬえ」



「カッコよく描いてくれよ」

▲1971年9月号掲載のP-40。宮崎監督はその後、大塚さんの依頼でJu87スツーカのキット用にデフォルメ画を起こし、木型まで進行したという

その記事は「キット総点検」という、国内外のメーカー各社が発売した飛行機キットの同一機種を比較・講評する連載で、宮崎監督は1971年7～10月号の4回、各号で3点ほどのカットを描いており、これが監督の模型雑誌デビューとなった。機種は以下の4機。

- 7月号…零戦
- 8月号…P-38ライトニング
- 9月号…P-40ウォーホーク
- 10月号…F4Fワイルドキャット

大塚さんは1980年代に『月刊ホビージャパン』での執筆活動を終えたが、1984年のMG誌創刊にあたり宮崎監督の執筆を推挙、『雑想ノート』誕生の大功労者となるのである。

宮崎監督は1963年に東映動画に入社、アニメーターとしての第一歩を踏み出したが、そこには監督の人生に大きな影響を与えた先輩がいた。それが大塚康生さんだった。アニメーションの技術面だけでなく、歴史や兵器のメカニズムなど趣味の世界においても態度を同じくし、宮崎監督のちに「ぼくの先生です」と語ったほどの存在だった（『本へのとびら』(岩波書店)所収）。

大塚さんはずいぶんけた動画職人として活躍するかわり、ジープをこよなく愛する軍用車両研究者、またスケールモデルラーとして趣味の世界を楽しんでおられた人物だ。1969年からは模型雑誌『月刊ホビージャパン』創刊号よりライターとして参画。国内外のミリタリーモデルの解説や軍用車の連載記事を執筆していたが、1971年の夏から4回にわたり、宮崎監督もカットで参加しているのである。職場の同僚である宮崎監督が「同じ沼」の住人であることを知った大塚さんが、空ものを描けるうつつつけの人物として、軍用機に関する記事でのカットを依頼したのだ（ちなみに大塚さんが作画監督を務めるTVアニメ『ルパン三世』は同年10月24日から放映開始であるのに注意！）。

extra episode.1

模型雑誌と宮崎監督を結びつけた人——
大塚康生さんが語る『雑想ノート』連載への道のり

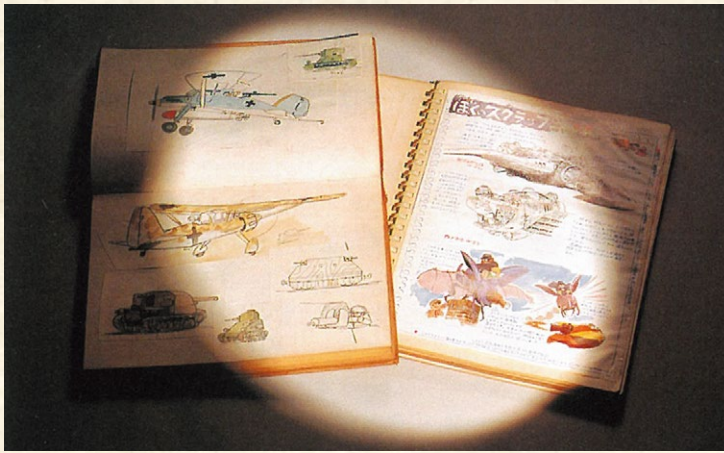
連載『雑想ノート』は1992年末に一度、単行本化された（『飛行艇時代』未収録版）。その際、編者（吉祥寺怪人）が大塚さんをお願いした連載までの逸話を再録。お二人の写真は今回が初出となる

「宮崎 駿の雑想ノート」(初版)
1992年12月

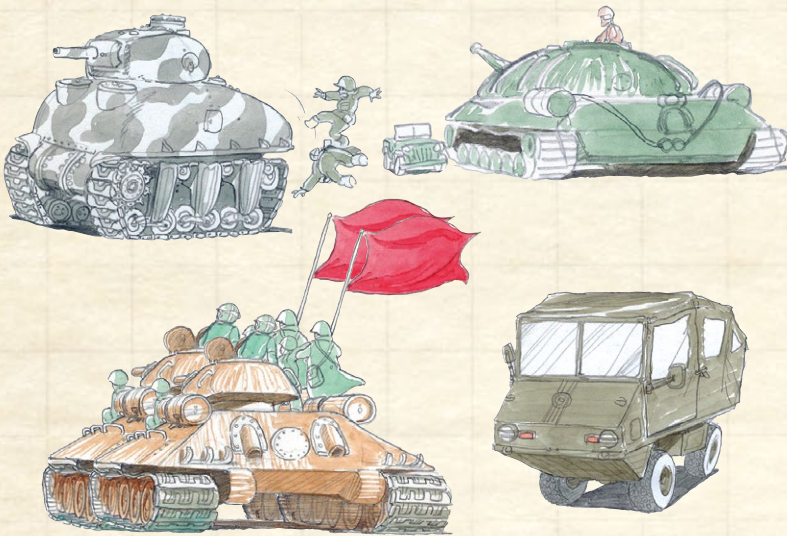


雑想スクラップBOOK 明かされる 『雑想ノート』誕生秘話

大塚康生



▲大塚さんが保存していた、宮崎さんの描いたスケッチ類。左のスクラップ帳は'70年代のもの。宮崎さんが丸めて放置したものを、いつの間にか大塚さんが回収、保存していたという



▲大塚さんが'70年代に描いていた軍用車のカット。それぞれの車両の持つ特徴が見事にカリカチュアされている。これらのカットと実車資料をまじえて構成された模型記事は、'70年代後半に巻き起こるミリタリーモデルブームの起爆剤となったのである。それと同時に大塚さんによる兵器のカリカチュア技法は、宮崎さんの雑学と妄想を表現する手法の源泉となった、とも言えるだろう



▲東映動画時代の仲間が集まる恒例の忘年会での宮崎さんと大塚さん。お二人の仲が伝わる素晴らしい一葉。2017年12月17日、東京・東小金井の二馬力アトリエにて（撮影・提供：安喰はと子）

「70年代のはじめ頃、僕は月刊ホビージャパンという模型雑誌に戦車やソフトスキン（トラックなどの非武装軍用車両）の話を書き連ねていました。内容は今から見るとごく初歩的なもので、実車の写真と文章に加えて、時々遊び半分で漫画的な戦車の絵を描いたりしていたのですが、僕の方がネタ切れになったこともあって、その当時一緒に仕事をしていた宮さん（仲間内での宮崎さんの呼称）に飛行機の漫画を頼んだのが始まりです。宮さんとは仕事とは別に飛行機や戦車が大好きだ、ということも充分わかっていましたからね。その時のカットはユニカースとかP.40をカリカチュアにした線描の簡単なものでした。僕の方は漫画化したジープがマックス模型でキット化されるなど、それなりの発展があったわけですが、宮さんの方もその後長い間『ハイジ』や『三千里』を作っていたながら、実は飛行機や戦車の漫画を描きたいという欲求はずっとあったんですね。

ずっとあとになって『カリオストロ』が終わってから暇だった時に、彼が東京ムービーのファン誌に発表した『僕のスクラップ』を見てびっくりしました。ドラマがあつて、描きたいことがページからはみ出ているようで、84年夏ごろモデルグラフィックス誌が創刊される際、すぐに『ああいうのを連載してよ』と持ちかけたのです。僕にはあの続きを見たという思いがありました。

発表の媒体として模型誌というのは実によかったですね。自動車雑誌が飛行機や戦車のマンガを載せてくれるわけではないし、アニメ誌でもない。僕は模型誌こそ宮さんが内蔵しているメカ・ファンタジーの世界の最高のブレイ・グラウンドだったと思います。ティーンガール戦車の話でも世間一般には充分に理解されるとは思えませんが、モデ・グラの読者だったら暖かく迎えてくれますよ。

おおつか やすお

1931年7月11日、鳥根県出身。1957年、東映動画第一期生として入社。日本のアニメ史に残る数多くの長編作品に参加し、若いアニメーターを育成した。宮崎氏もその中の一人で、'70年代以降にはコンビを組んで数々の人気作品を生み出した。アニメーターを本業とするかたわら、軍用車両の研究者としても活動。2021年3月15日逝去、享年89。

【代表作】『太陽の王子ホルスの大冒険』、『ルパン三世カリオストロの城』、『未来少年コナン』、『ジャリン子チエ』他。

【著書】『作画汗まみれ』[改訂最新版]、『軍用ジープ』、『大塚康生16歳の画帖』、『ジープ太平洋の旅』、他

すね。彼は僕みたいに機械そのものの細部や歴史をほじくりまわすのではなくて、機械と対面した人間の感性みたいなものに目を向けた人ですね。それも機械も人間も一種ファンタジーな世界の中に入れて、それでいてリアリティックな描き方をしよう。存在感があって実に楽しい。とても余人の真似の出来ない世界を創り出しています。

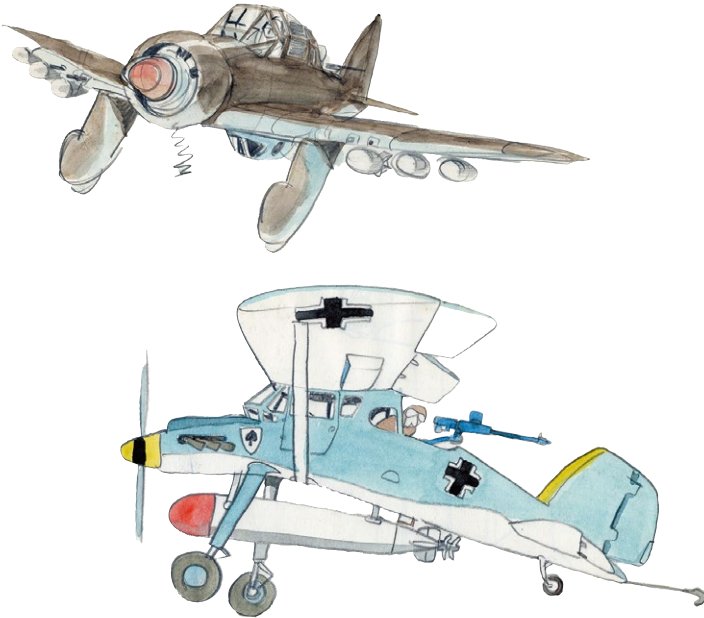
というわけで、雑想ノートは映画人としての宮さんが映画では出来ない部分を模型誌で遊ばせてもらっているという感じですが、働きの彼のことでですから、遊びという感覚ではとらえられないペースでやってしまうようですね。新作『豚の虎』の10ページの予定が12ページになったという話は、表現したいことがいっぱいあって、はみ出してしまおうじゃない……。昔、宮さんの方から「北アフリカで動員されたすべての車両を網羅したストーリーを作った二人で描こうよ」と誘われて呆然としたことがありました。今の宮さんなら、時間さえあれば実現できるのではないかと思えます。やってほしいですね！（談）

（初出：『宮崎駿の雑想ノート』1992年初版）

1981年、 雑想ノートの萌芽 『ぼくのスクラップ』

1971年の『月刊ホビージャパン』でのカット作画のエッセンスをさらに飛躍させた形式がこの『ぼくのスクラップ』だ。1981年10月～12月までの3回の記事だが、『雑想ノート』の原型となっているのがわかる

◀周囲のカットは宮崎監督がアニメスタジオで描いた落書き。大塚さんは『月刊ホビージャパン』1973年9月号で以下のように評している。「宮崎はやおさんの描く漫画の飛行機の一例。巧みにデフォルメされ特徴をとらえた描き方がしてあるがウソはない。彼はこういう種類の絵を毎日描いているが、はじめに写真を眺めくらし、形が頭の中に入ってしまうと今度は決して写真をみないで描くのがコツだという」



ぼくのスクラップ 第1回 みやざきはやま

1971年10月

いつかフィルムの中とぼけたらと思う
村舎がはいまま 明々といは飛行機のスクラップ。
これも企画が通らないので 待機中のもの。

夜向 ひとかたに侵入
して来る インバザ(宿屋
人ではない)の偽装機。

1940年代

村舎の絵柄は強力で
ナニヤ コチャコチャと各種ビ
と32. アゴの動きも構えにな
っている。

スピルビエロ
(はじまり)

ソックリなのは
尾部の村舎の扉で、
安全ベルトがある
にはあるが、ほと
んど村舎の手が
使ったかたまり。
2本の手スリを
押ししめ 彼等は
長時間の飛行に
耐えるのである。

村内に村舎があり、自分勝手に
『エンジン』と名づけて112か、背
内の6つのコが 交互に燃焼と吸排
をくりかえし、大気とほぼ同温の高圧が
スス、翼のスピットと下部の噴出口より
送り出す。
高速飛行より 中々やがて滑空を
得意と列代物で、ほとんど無音で
ある。

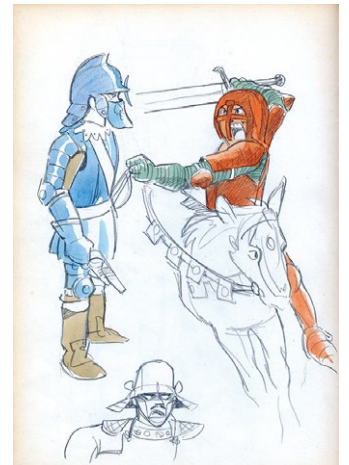
カウ「虫」マシン

これも出番がないはず
50年以上のゴキブリが
いる。虫型オニソウター
上翔がなると
半透明のババコ翔が
コレと
なると。

だいたいこの葉の
葉物は、スクラップ
さす程度の悪役に
しかるにない。

エンジンはパルス
ロケットで、前後重
しなると、トットとて
音をたてる。元来は右の飛行機用
にヒョウリ宿のたが、村舎のデ
インは、あり作りに使った。

たまたま同名存在の本物があっても関係のない
★ このイラストに登場するすべての著作権は作者のデッサンにあること明記します ©1981 HAYAO MIYAZAKI



◀東京ムービー(現・トムス・エンタテインメント)のファンクラブ会報(1981年10月号)掲載の第1回。このスピルビエロは『風の谷のナウシカ』のガンシップそのものだ。ちなみに『アニメージュ』でのナウシカの漫画連載開始は1982年2月号からである

ぼくのスクラップ No.2

みやざきはやま

不吉な射撃座

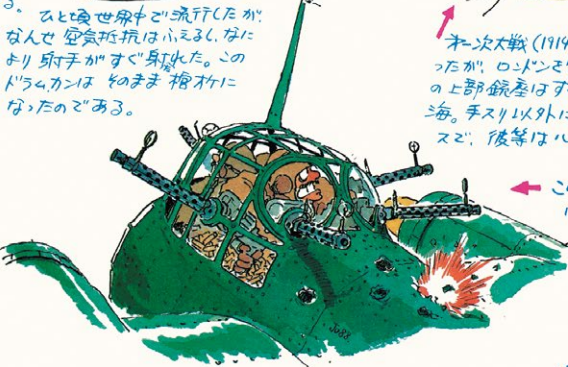
本当にあったこと

なにしろやたらに
せまひ。腹ぼりにな
って、巨銃砲をたさ
れ防弾中飯も
なくまはしく
死んでいった。

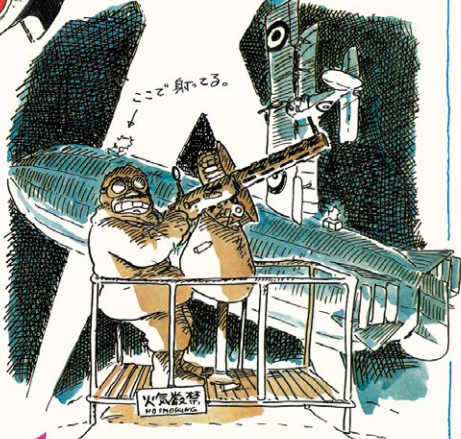
だから今も
ぼくは、スバルのじやない。

垂下銃塔というのがあ
った。要するに腹のとを守
るために、ドラムカンそび
に射手をいれちゃって
170年代物である。

むとや世界で流行したか、
なんせ空襲抵抗はふるし。なに
より射手がすぐ射撃した。この
ドラムカンはそのまま機材に
なったのである。



ぼくは、メカマアで「はな11」で飛行機の回廊をた
くす。それに乗った人肉達の運命の予知気になっ
てく
まう。
中島飛行機(今の富士重工)の陸軍重
爆轟轟のころ、こゝな飛行機を「空とん
び」が
撃墜した運命の責任は重い。



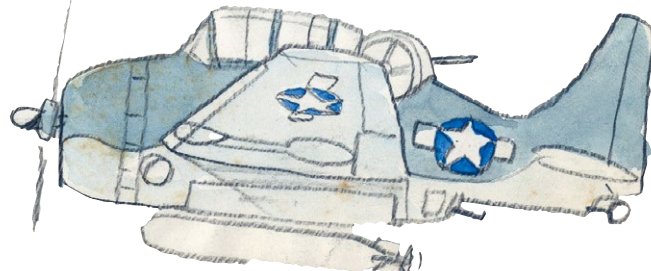
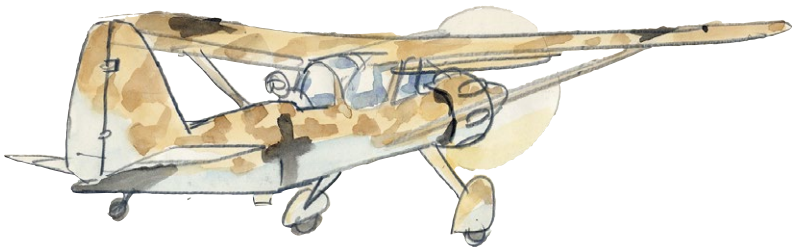
本次大戦(1914-18)に、おそろしい射撃座が多か
ったが、ロンドン上空を飛んだドイツのツェペリン飛行船
の上部銃座はすさまじい。なにしろ足元は水素ガスの
海。手すり以外に守りものがない。風吹かすつら
すと、彼等は心身共に凍りついた。

これは、何しすぎた射撃の例。
はじめは一挺だったが、バタバタおと
して、ついに4挺の銃を一人で
受けもつめた。せまひコッ
ペリで、右往左往しながら、やたら
バタバタおとされた。ドイツの爆撃機
の伝説である。

細部は
★このイラストに登場する飛行機その他の機種類は、たとえ似たモデルが 存在したとしても すべて作者のデッサンであります。
© 1981 MIYAZAKI HAYAO



▲1981年11月号掲載の第2回は第1回の架空飛行メカから実在の軍用機が題材となった





9784499234283

ISBN978-4-499-23428-3 C0076 ¥3600E

定価(本体3,600円+税)



1920076036002

宮崎駿
模型雑誌の中の